

21世紀を担う生徒の育成を目指して

～評価を見据えた学習指導の探究～

研 究 部

1. はじめに

新学習指導要領の下での教育がスタートして半年余りが経過した。学校週五日制への移行に伴う授業時数の削減や、選択教科、総合的な学習の登場など、カリキュラムの上でも様々な変化が見られ、各学校ごとに創意工夫がなされていることと思われるが、並行して採用された新しい評価についても知恵を絞っておられるところが多いのではなかろうか。

本校では、平成6年度からの「今を見つめ明日を創る生き方を求めて」という研究主題の下に、平成9年度から12年度まで「総合的な学習のあり方」という副主題を設定し、主として総合的な学習の先行実践研究を行ってきた。また、平成13年度は、「新学習指導要領完全実施に向けて」という主題の下で、総合的な学習に選択教科を加えた先行実践研究を実施した。(詳細については、本校研究紀要第40号～44号を参照のこと)

平成14年度は、「21世紀を担う生徒の育成を目指して」という研究主題の下に、「評価を見据えた学習指導の探究」という副主題を設定し、評価を活用して学習指導を充実させるための実践研究を行っている。

2. 研究主題について

21世紀を担っていくために、生徒達に「生きる力」を身につけてもらいたいと考えている。「生きる力」は周知のことと思われるが、「ゆとり」とともに新学習指導要領のキーワードとなっているものである。この用語について、文部科学省の資料には次のような説明がなされている。

新しい学習指導要領がめざす“生きる力”のある子ども像は、「確かな学力」を持った子供です。では、「確かな学力」とは何か。もちろん知識や技能は大切ですが、単なる知識の量だけでなく、新しい学習指導要領では、以下のような総合的な力を「学力」ととらえます。

- 知識や技能を身につけ、活用する力
- 学ぶことへのやる気・意欲 ●自分で考える力
- 自分で判断する力 ●自分を表現する力
- 問題を解決し、自分で道を切り開いていく力

本校では、これまでの総合的な学習や選択教科の先行実践研究の中で、「多様性の保証」「学習の質の保証」「自分を見つめる力を付けさせる」の三つを基本理念として、例えば選択教科においては生徒選択を採用したり、総合的な学習においては課題追求型の学習パターンを取り入れるなどの工夫をしてきた。

そうした積み重ねの中で、選択教科や総合的な学習においては、いわゆる「学力」ととらえられている総合的な力は着実に培われてきていることを実感している。

3. 研究副主題について

平成14年度からは、教科の学習に焦点を当てた実践研究を行うことにした。教科の授業時数が削減された中で、教科学習をいかに充実させていくかということが大きな課題となってきた。教科学習を実りあるものにし、生徒に「生きる力」を身につけさせる過程において、「評価」を活用していこうというのが「評価を見据えた学習指導の探究」という副主題の趣旨である。

「指導と評価の一体化」が重視されている。教育課程審議会の答申でも、「生きる力」を育成するために、評価を効果的に活用し、評価の結果を踏まえて次の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再び評価することが重視されている。また、生徒達にとって、評価は自らの学習状況に気づき、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促すという意義があるとも述べられている。

「評価」と一言と言っても、規準から、評定にいたるまで、様々な視点が挙げられるが、本校では今年度は、特に教科における「授業中の評価」を研究の中心に据えている。教科の学習は、何よりもまず授業中心と考えるからである。

授業における評価のあり方として、次のような点をポイントとした。

- ① 何のための評価か。
- ② どのような方法で評価するのか。
- ③ どう評価するのか。
- ④ 評価の結果をどのように生徒にフィードバックするのか。
- ⑤ 評価の結果をどのように教師自身にフィードバックするのか。
- ⑥ 評価の結果が次の活動（生徒）にどう生かされたのか。
- ⑦ 評価の結果が次の指導（教師）にどう生かされたのか。

①については、一般的に診断的評価・形成的評価・総括的評価等が挙げられる。評価する目的をはっきりさせ、必要な時期、必要な場面で適切な評価を行って行かなくてはならないと考えている。

②については、国立教育政策研究所の資料には次のような記述がある。

各教科の学習活動の特質、評価の場面や評価の規準、児童生徒の発達段階に応じて、ペーパーテスト、ワークシート、学習カード、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポートなどの様々な評価方法の中から、その場面における児童生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが必要である。

授業中に関しては、それらの中でも特に教師の「観察」による評価の場面が多くなる。観察による評価については、本校の校内研修で研究授業を重ねる中で、一時限に数名が限度であるという意見で一致した。しかし、数時間にわたっての評価となった場合、同一の状況で評価したことにならないのではないかという問題点も出てきている。

いずれにしてもこの観察による評価のためには、教師自身が評価規準を明確にしていることと、その規準が主観に頼るものではなく、客観性を持った共通理解を得られたものであることが求められる。

評価をより客観性のあるものにするため、教師側からの評価だけではなく、生徒どうしの相互評価を併用していくことも模索中である。

相互評価に関しては、生徒どうしの批評は効果的であるという指摘がある一方で、相互評価という活動は、授業の中ではいちばんつまらない活動の時間帯となっているという指摘もあり、効果的な活用方法については検討課題の一つである。

自己評価は主観に頼る部分が大きく、生徒によって自分に甘い、厳しいという点で差があるため、今のところ直接教師の評価には結びつけにくいと考えている。

いずれにしても、教師側の評価同様、規準を明確にしておくことがより客観的な評価につながるものと思われる。

フィードバックに関しては、受け手がその情報を必要なときにタイミング良く出せるかどうかということがポイントとなる。必要なときにその場でという即効性が求められる。授業内での効果的なフィードバックの方法についても検討していかなければならないが、生徒どうしの相互評価はその一つになりうると考えられる。また、教師からフィードバックする場合には、生徒と規準のもののさしを共有していることが大切である。

以上のような点からも、評価の規準を授業の導入段階で生徒に提示しておくことの有効性を実感しており、その効果的な提示方法も検討中である。

今年度は新しい評価の初年度ということもあり、特にどのポイントを中心にという形ではなく、授業中の評価について①～⑦を意識した授業実践を行っている。

4. 校内の研究体制

学校全体の評価については、教務部が中心となっているので、細部については必要に応じて教務部と研究部が連絡を取り合って研究を推進している。

平成14年度は教科中心の研究ということもあり、各教科から一名ずつ研究部に所属する体制をとっている。

研究を開始するにあたり、月一回教科輪番で校内研究授業を実施し、その後授業整理会兼校内研修会を開催することにした。原則として月の後半の五限目に授業を設定している。

また、研究授業にあたっては原則として金沢大学教育学部の教科担当教官と連絡を取り合い、当日の参加も依頼している。

今年度は、次のような内容になっている。(予定も含む)

月	教科	学年	整理会・研修会
5月	英語科	1年	授業整理会・教科ごとの評価に関する意見交換
6月	社会科	1年	授業整理会・教科ごとの研究テーマ発表 金沢大学 林紀代美先生・学生授業参観
7月	理科	2年	授業整理会・金沢大学 松原道男先生評価の講話
8月	評価に関する研修会		講師 福井大学 安藤輝次先生
10月	数学科	2年	授業整理会
12月	国語科		授業整理会
1月	技術・家庭科		授業整理会

5. 指導案について

授業の指導案については、国立教育政策研究所の資料等を参考に、従来のものに評価を意識した項目をいくつか加えて研究部でひな型を作成した。指導案の形式よりも、授業にあたって評価に対する指導者としての意識を明確にすることを第一とした。（詳細については、次章の教科のページを参照のこと）

6. 今後の課題

ここ数年来本校が行ってきたのは先行実践研究であり、ある意味では何をどのように行ってもよいというところがあった。今年度の研究はこれまでとは異なり、すでにどこでも実施されている評価についての同時進行的な研究であり、行うのが当たり前という点での難しさがある。

評価に関してどこを切り口にするかで校内でもいろいろと議論をしたが、最終的には「授業を中心とした評価」というところに落ち着いた。今後は前述した①～⑦のいくつかに的を絞り、「生きる力」を育成すべく、教師にとっても生徒にとってもよりよい授業の創造を目指したい。

* 参考資料

●教育課程審議会答申（2000.12）

●国立教育政策研究所教育課程研究センター（2002.2）

評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）

●安藤輝次（2002.3）『評価規準と評価基準表を使った授業実践の方法』黎明書房

●文部科学省パンフレット 「生きる力」のある子どもたちが誕生します